特別講演

徳山藩戊辰戦争殉難録

東行記念館　副館長　学芸員　一坂太郎

長州藩の支藩である徳山藩（四万石）は、戊辰戦争勃発直前の慶応三年（一八六七）一二月、藩主世子毛利元功が二二八名を率いて上坂。翌四年（明治元年）一月の鳥羽・伏見の戦いには、山崎で旧幕軍を撃破した。さらに東征軍として蝦夷地に渡り、箱館戦争に参加し、明治二年七月一二日、徳山へ凱旋した。

戊辰戦争で活躍した徳山藩の軍隊は、山崎隊と献功隊である。

山崎隊は、慶応元年四月に一五〇名で結成された徳山藩士民の有志隊で、のち八〇名増えて二三〇名となった（時山弥八『もりのしげり』）。

献功隊は明治元年八月七日、徳山藩朝気隊・斥候銃隊・武揚隊・順詳隊が合併して成った。明治三年六月一六日に廃隊となる（同前）。

本稿では、異郷の地に骨を埋めた徳山藩の兵士たちの墓碑を巡った記録を、拙著『防長戊辰掃苔録』（平成九年、奇兵隊士研究所・東行庵）より抄出し、紹介しておく。

東福寺（とうふくじ）

京都府京都市東山区本町東福寺恵日山南岳。戊辰戦争の火ぶたは明治元年一月三日、京都郊外の鳥羽・伏見において切って落とされた。この戦いに参加し、戦死した長州藩の兵士三六名は、東福寺東南方の丘陵の

上に埋葬され、木標が建てられて招魂場となった。のち今日の石標に替わり、明治三三年の三三回忌の際には、一四名の戦傷病死者も追祀された。うち、徳山藩関係者は、次の一名である。

福嶋男也（ふくしまおとや）

病院付医師。徳山の人。

墓碑は、正面に「徳山藩福嶋男也源正盛墓」、裏面に「慶応四年戊辰正月六日戦於城州八幡別峰邨戦死行年二十八歳」、側面に「辞世　進み出てあらしにむかふ武士のけふかぎりの死出の山道　源元盛」と銘記する。新南陽市永源山にも墓あり。

霊山（りょうぜん）

京都府京都市東山区清閑寺霊山町。明治元年五月、「嘉永六年以来の国事殉難者を東山に祭れ」という明治天皇の勅命による太政官布告が発せられた。これにより、長州藩は七月、諸藩に先駆けて招魂社を東山霊山の地に建設し、禁門の変の戦死者など一九一柱の墓標を造った。その後、新たに判明した殉難者なども加わり、現在、長州藩関係の祭神は二五八柱、うち墓標が現存するのが一七六柱である。

（『霊山祭神の研究―長州藩』による）

徳山藩関係者は、次の一名である。

山縣友右衛門（やまがたともえもん）

徳山藩士。徳山中隊に属し、京都河原町（大坂とも）の陣中で病没。

墓碑は、正面に「徳山中隊兵員　山縣友右衛門薫友墓」、左側面に「慶応四戊辰正月廿三日病死　于河原町営中　行年二十七歳」と銘記する。

三内霊園（さんないれいえん）

青森県青森市三内霊園。一万数千基の墓碑が並ぶ広大な市営霊園の一角（駐車場向かい側の生け垣中）に、戊辰（己巳）戦争の際、青森で亡くなった「官軍」の墓碑二〇基が並ぶ。

箱館戦争が始まるや、青森は「官軍」の一大基地と

三内霊園

化し、傷病兵の後送治療の場としての性格を強める。博労町の遊廓を総借り上げして病院に当てた。

凱旋にあたり長州藩は、青森に残す墓の管理を地元の民間人岩吉に委託した。

ところが岩吉は役目を果たさず、墓は荒廃した。これを嘆いた青森報知新聞関精一社長は、有志に呼びかけて義捐金を募り、明治九年一月、戊辰堂という一堂宇を完成させた。

時は流れて昭和二一年六月、GHQの国家神道禁止令が発せられ、これらの墓は官修から青森市に管理が移された。そこで昭和二三年七月、青森市は戊辰堂並びに市内の各寺院に官修墳墓として祀られていた墓を、都市計画の一環として造った三内霊園に集めて、現在に至っている。

徳山藩関係者は、次の三名である。

藤川駒之丞（ふじかわこまのじょう）

山崎隊士。都濃郡久保河内（下松市大字河内）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩　藤川駒之丞源正三之墓」左側面に「明治二己巳年四月十一日於松前赤神村銃傷同年六月六日於青森養生局死」、右側面に「行年二十三歳」と銘記する。

青森戊辰堂より移す。新南陽市永源山にも墓あり。

清水留之進（しみずとめのしん）

山崎隊士。徳山藩士。富之進ともいう。青森滞陣中に病没した。

墓碑は、正面に「徳山藩　清水留之進源清行之墓」、

裏面に「明治二己巳三月十三日歿　行年二十一才」と銘記する。青森戊辰堂より移す。

竹蔵

山崎隊夫卒。青森滞陣中に病没した。

墓碑は、「徳山　山崎隊小者　竹蔵之墓」、左側面に「行菴明林居士」、右側面に「明治二己巳正月廿有三日死　行年三十一歳」と銘記する。青森常光寺より移す。

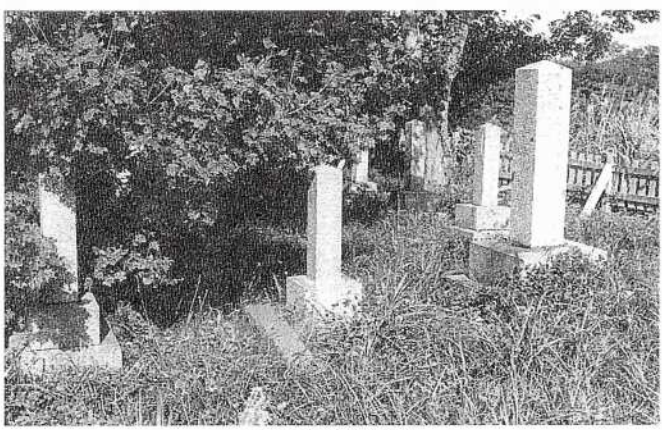
兵士である藤川・清水は神葬だが、夫卒である竹蔵は仏葬という差別化がはかられている。施主は山崎隊。

桧山護国神社

北海道桧山郡江差本町。箱館戦争で戦死した長州（徳山を含む）・松前・津軽・久留米・筑前・備前・大野・水戸・福山・箱館府の九二柱を祭る江差招魂場（所）を前身とする。

江差は、「官軍」の会議所が置かれた地である。その後、桧山護国神社と改称され、太平洋戦争にいたるまでの地元出身戦没者も合祀された。

昭和四六年一二月には、「官軍」の墓碑は町指定文化財となり、保存されている。



桧山護国神社墓地

徳山藩関係者は、次の一一名である。墓所入口に近い方から紹介する。

波多野権吉

山崎隊夫卒。都濃郡福川（新南陽市福川）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩小者波多野権吉之墓」、左

側面に「明治己巳五月八日戦死於茂草村　行年二十二歳」と銘記。『防長維新関係者要覧』では四月一一日、二三歳で没したとある。新南陽市永源山にも墓あり。

島田卓熊

献功隊一番小隊左翼伍長。徳山藩士。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士島田卓熊藤原正清之墓」左側面に「明治二己巳年五月八日戦死於大川村之役、二十九歳」と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

宇田新三郎

献功隊士（二番小隊伍中）。徳山藩士。

墓碑は、正面に「徳山藩士宇田新三郎源直好之墓」左側面に「明治二己巳年五月八日戦死於大川村之役、二十九歳」と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

秋本喜一郎

山崎隊士。都濃郡福川（新南陽市福川）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士秋本喜一郎源義利之墓」左側面に「明治二己巳四月十一日戦死於茂草村之役、十九歳」と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

戸倉太一郎

山崎隊士（一番小隊中）。都濃郡中山村（徳山市大字上村）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士戸倉太一郎平盛義之墓」左側面に「明治二己巳年四月十一日戦死於茂草村之役二十歳」と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

瀬来道太郎

山崎隊（二番小隊中）。都濃郡山田村（下松市大字山田）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士瀬来道太郎平政道之墓」左側面に「明治二己巳年四月十七日戦死於福山折戸之役　二十六歳」と銘記。木版刷「松前領江差墓所之図」には「道治郎」、『防長維新関係者要覧』には「道三郎」とあるが、いずれも同一人物と考えられる。新南陽市永源山にも墓あり。

佐伯三保三

山崎隊士。都濃郡福川（新南陽市福川）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士佐伯三保三源義友之墓」

左側面に「明治二己巳年四月十一日戦死於茂草村之役二十九歳と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

林与（はやしあたえ）

献功隊参謀。徳山藩士林麓正謙の長男。都濃郡徳山村の人。藩に出仕して物頭番頭を経て軍制改革の任にあたる。文久二年（一八六二）には、藩主毛利元蕃の京都守衛の先発として上京、元治元年（一八六四）には砲術修行のため宗藩守永弥右衛門が督する彦島砲台を守る。慶応三年一二月、筆商林屋与右衛門と変名して京都に潜入して事情探索。明治元年八月には、献功隊参謀兼軍監として北越に出征し、同年一〇月、羽後土崎に着いて蝦夷出張命令を受ける。翌二年四月に江差に至り、館村の弘前藩兵と交替。上二股山の険に拠って旧幕府軍を防禦し、五月、大野大川村に進撃中に敵の襲撃を受けて奮戦するも大川蒜沢において戦死した。大正元年二月、正五位が追贈される（『近世防長人名辞典』『贈位諸賢伝』ほか）。

墓碑は、正面に「徳山藩参謀林与藤原憙之墓」、左側面に「明治二己巳年五月十一日戦死於大川村之役、二十七歳」と銘記。新南陽市永源山、徳山市泉原墓地にも墓あり。

古志義人（こしよしと）

献功隊士。徳山藩士古志信邦の嫡子。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士古志義人源直庸之墓」左側面に「明治二己巳年五月十一日函館之役戦死于上山　三十七歳」と銘記。新南陽市永源山に墓あり。

中村寛三郎（なかむらかんざぶろう）

山崎隊士。都濃郡富田平野（新南陽市富田）の農。

墓碑は、正面に「徳山藩兵士中村寛三郎多々良寛之墓」、左側面「明治二己巳年五月十一日戦死於函館港之役　二十六歳」と銘記。新南陽市永源山にも墓あり。

すべての墓所を巡って感じたことがある。

山口県にとっての明治維新とは栄光である反面、多くの犠牲者を生んだ大事件だったということである。江差に墓所のある献功隊参謀林与のご子孫である吉田

和代さんにお話をうかがっていると、遠隔の地で与を失った当時の親兄弟の悲しみを、いまだ引きづっておられるような印象を受けた。異郷の地に骨を埋めた青年も、その家族も、みな維新という大変革の犠牲者であることを忘れてはならないと、私自身いつも考えている。

京都から関東・東北・北海道等の各地に眠る長州藩兵士たちの墓は、その大半が無縁であるにもかかわらず、今なお大切に保存され、手厚い供養が続けられている。中には江差町のように行政が文化財に指定して保護している墓地もある。これなどは、維新関係者の墓碑が多数存在する山口県側が、逆に見習わねばならない部分かもしれない。

なお、徳山藩関係ではないが、現在の徳山市湯野・戸田の領主堅田家の兵士たちの墓が、東京都港区愛宕二―四―七青松寺と神奈川県横浜市西区元久保町久保山に現存するが、今回は割愛させていただく。詳細は自著で恐縮だが、『防長戊辰掃苔録』（奇兵隊士研究所・東行庵）を参照いただければ幸甚である。

一坂太郎（いちさかたろう）

略歴　一九六六年、兵庫県芦屋市に生まれる。
大正大学文学部史学科卒
現在、東行記念館副館長　学芸員

著書　『高杉晋作の手紙』
『吉田松陰門下生の遺文』
『高杉晋作覚え書』　『久坂玄瑞遺墨』
『高杉晋作　漢詩改作の謎』
『防長戊辰掃苔録』　『高杉晋作秘話』
『龍馬が愛した下関』
『「竜馬がゆく」読本』　その他

連絡先　下関市吉田町一一八四　東行庵
電話　〇八三二―八四―〇二一一